

かにも各地でこのような制度を発足させている。郵便局の車両による「こども 110 ばん」もスタートしている。

しかし、せつかくこのような「通報協力者制度」を発足させても、一般の人に認知されていないと制度は生かされない。乗務員の教育や訓練はもちろんのこと、たまたま乗り合わせた客の理解・協力も欠かせない。

子どもを犯罪から守るには、地域の中で多くの人が連携していく必要がある。

幼稚園・保育園での「防犯教室」や小学校での総合学習で子どもたちに教えたり、広報等を通じて市民に周知することが大事であろう。

参考文献

- 1) 「ヒヤリ地図をつくろう ～シルバーによるシルバーのための交通安全～」
（財）国際交通安全学会，1998年3月
- 2) 『「ヒヤリ地図づくり」提案の成果とその運用に関する研究』
（財）国際交通安全学会，2000年3月
- 3) 「市民参加型交通安全対策の実現に向けた社会実験」報告書
（財）国際交通安全学会，2002年7月
- 4) 『「みんなで考えよう まちを活かす「みち」』
春日井安全・安心まちづくり女性フォーラム実行委員会，2000年11月
- 5) 「地域の安全のために セーフティーマイタウン春日井」
春日井警察署生活安全課，2001年4月

（主任研究者 詫間晋平 松村 みち子 出典：「児童研究」第83巻，2004年）

資料7. 『子どもの危機管理の実態とこれからの安全対策について』

我が国で、いわゆる「少子化」の問題が注目され始めて数年が経過します。実際にその問題が深刻になるのは、まだまだ先のことと思われていましたが、昨年はずいぶん、日本の男子の人口が数千人減少し、お母さんが一生のうちに産まれる子どもの数（合計特殊出生率）は、最近のデータでは1.29以下で、東京都渋谷区では1.0を割り込んでいます。また、0歳～14歳の子どもの人口が占める割合も13.9%となり、ついに14%以下となってしまいました。

子どもの数が少なくなると次第に、物を作る人、そして物を買って消費する人の双方の数が減少し、経済全体も、その規模が縮小してきます。そのような社会では、子どもの価値は人間として尊重され、その福祉は向上されなければなりません。子どもは家庭の宝であり、「かすがい」（つぎとめるもの）でもあります。

そのような大切な子どもを健全に育てることは親の責任でもあり、地域社会全体の責務でもあります。大切な子どもたちを傷つけたり、死亡させたりしている原因は、幼児から少年期にかけては、病気ではなく事故・事件であり、全死因の第1位を占めています。しかも、その割合は欧米諸国に比べると、かなり高い数値となっています。

子どものために「安全で安心」な福祉レベルの高い社会、特にネットワークとしての地域社会の構成と展開をいかにして進めるかが今日の重要な課題となっています。おりしも、従来では考えられなかった重大な事件や犯罪が、尊い子どもの命やそれを保護すべき職員の命まで奪っております。

昨年11月17日の午後に奈良市内の富雄北小学校の1年生女子（有山楓ちゃん）が中年の男性（新聞販売店職員37歳）に誘拐され殺害された悲しい事件がありました。また、今年に入ってから（2月14日午後）大阪府寝屋川市立中央小学校で、その学校の卒業生男子（無職17歳）が教諭（鴨崎満明先生44歳）を後ろからさしみ包丁で刺し、失血死させ、かつ、女性の教諭と栄養士にも重症を負わせるという重大な事件も発生しています。この事件は、子どもだけではなく、職員（教諭他）をおそったケースで、従来の事故防止マニュアルが全く想定していなかったパターンであります。

犯人は「自分がなぜあんなことをしたかわからない。」と言っており、目的と行動が「かいら」（はなればなれでつながっていない）という精神症状がみられています。しかし、包丁を2本用意し正確に急所をねらうというように意図的に行なっています。

このように、新しい犯罪や事件の内容は、予想外の「現実」が、想定した考えに先行しています。いくつかの「事故防止や安全のためのマニュアル」を無力化してしまっていると言えます。それと同時に、これまでは、事故といえば「無意図」的で、一見偶然と思われる「外力」によって発生する人体の損傷をさしていましたが、近時は「意図」的な「外力」（暴力や殺意）による事件・犯罪にも対応して、安全と防犯の対策を立てる必要性が生じてきています。主として、前者は「安全」、後者は「安心」への対策として分けて考えることもできます。

また、今後は児童館、保育所、幼稚園、小・中学校、公民館などがばらばらに「点」として存在して機能するのではなく、ネットワークとして、例えば、東京都で始めようとしている「地域教育プラットフォーム」のような仲介的な組織を作って、「面」とし

での「セーフティーネットワーク」を構築してゆく必要に迫られています。

以下に、そういった活動に少しでも貢献できればと考え、「こども未来財団」のご支援も得て、主として児童館と連携した「放課後児童クラブ」での、地域における「安全・安心」の実態調査とその対策の概要を紹介します。

健全育成事業展開のための重要な活動の柱が「放課後児童クラブ」といえます。

事業実施の初年度となる平成 10 年(5 月 1 日付)は、その組織数(クラブ数)は 9,729 所でありましたが、平成 13 年度にはすでに 1 万箇所を超え、平成 16 年には 14,000 か所以上を数えるに至っています。

その児童クラブへの保護者からのニーズや要望は年々高まってきており、クラブの増設が各地にみられます。(ex.平成 17 年 4 月よりは、本研究メンバー所管の東京都赤羽根児童館にても 1 クラブの増設が決定されました。)

ただし、全般的に一組織 36 人~70 人規模と 71 人以上規模の増加率が高く、いわゆる「大規模加算」(人件費、補助基準)など、行政上の問題点も残されています。

本研究では、「放課後児童クラブ」への主として「共働き」の保護者(特に母親)からの要望とニーズに答えるため、健全な児童の「育て」と保護者の「仕事」間の両面を支援し、地域の「子縁」(コミュニケーション・グループ)の形成にも注目しています。

しかし、一方で児童の保育用の安全で有効な遊具・玩具の導入と本箱やキッチン等の配置や、それを適切で安全に指導できる職員(指導員)の採用などは必ずしも万全とは言えません。ここでは、主として調査研究やインタビューの実施による客観的な危険因子の分析を通して、事故の少ない安全で安心な放課後児童クラブの運営に効果的に貢献したいと思えます。

「放課後児童クラブ」における転倒や落下などによる比較的軽度の傷害は、既に各組織から報告されていたところですが、おりしも、昨夏(平成 16 年 8 月 20 日午後 4 時頃)広島県福山市山手町の市立山手小学校北校舎 2 階の「児童クラブ」(市教委が運営)登録児 H.H 君(小学 3 年生 8 歳男子)が、出入り口用のガラス戸(1.8m×0.9m)にぶつかり、ガラスの破片が左胸に刺さり、約 3 時間後に失血により死亡するという痛ましい事故が発生しました。(警察署にはその時点になって、はじめて病院より通報された。)

これが「児童クラブ」における死亡事故としては、我が国で最初のものとなりました。

(このため、厚生労働省と文部科学省の両省より、速やかに今後の児童クラブにおける事故防止と安全指導に関する通知が発せられています。)

本研究においても、軽度の事故のみならず、このような重大事故の防止方策についても視野に入れた調査と分析を目途としています。

研究の手續としましては、主として、全国 10 地区にある 10 数か所の「放課後児童クラブ」の保護者と職員に対して、まずインシデント・サーベイを含めたアンケート調査を実施しました。さらに、一部参与観察および面接調査を良好例のケースについて実施しました。

アンケートは自由記述を含めた 20~25 問で構成し、一部、児童クラブにおいてテス

トランを行ない、妥当性・信頼性・弁別力を高めました。

調査対象の地区としては、全国的な視野に立って、以下の地区の協力を得ました。

それは、岩手県盛岡市内、千葉県船橋市内、埼玉県和光市内、東京都北区内、兵庫県篠山市内、佐賀県佐賀郡川副町内の6地区です。

対象者数は、児童数にして200強を予定し、211を回収できました。

重大事故に至らない前の「ヒヤリ・ハット」レベルの事故・ケガを含めた無意図的な事故の原因に関して「潜在危険」の分析を行ないました。すなわち、児童、保護者、職員の「行動」面（リスクテイクを含む。）、「精神」面（ストレスを含む。）から危険因子の抽出です。

続いて、「環境」面（遊具、施設の瑕疵を含む。）と「服装・着衣」面（ヘアピン、ブローチ等を含む。）の危険因子についても検討しました。

これらの潜在的危険因子を総合的に判定し、児童クラブに有益な事故防止対策マニュアルの構成にむけた提言を行ないます。

アンケート調査に用いた調査票の構成については、保護者用(版)と指導員用(版)を作成しました。

構成にあたっての基本的な視点としては、まず、遊具、施設、プレイルームの広さ等の「ハードウェア」の柱と保育・指導のプログラム、指導員の人数、資格、子どもの関心等の「ソフトウェア」の柱を立てました。

その「柱」の間をつなげる概念として、子どもの「リスクテイク」行動、保護者の「医療・治安」等への不安、「事故・犯罪」への不安が底辺に横たわるコンセプトとして考えます。

具体的な項目には、子どもの状況（関心、遊び等）と安全指導、事故時の安全対策、傷害保険の加入有無、管理マニュアルの内容（運営基準の適合性）、指導員の資格と研修、児童クラブ全体への改善意見などが含まれています。

基本的な事項、すなわち、共働きの度合い、(90%前後)保護者の年齢の幅(35~39歳帯と40~44歳帯が最頻値です。)、子どもの性別(ほぼ50%ずつ。)、兄弟・姉妹がいる割合、「ケガ」の種別、子どもの好きな遊具の種類等は、ほぼ共通した傾向を示しています。

ただし、東京都北区などの大都市部では、居住形態は集合住宅(70%前後)が大多数となり、地方の市町村は一戸建て住宅が多いのは当然の差異でありましょう。

注目すべき点の一つは「子どもが事故や犯罪にあうかも知れない」という不安(事故・犯罪に関する不安)は大都市のみでなく市町村部に広がり、ほぼ共通した80%前後となっていることです。そして、その危険を回避するための「しつけ」としても、やはり共通して「知らない人について行かない」(80%程度)、「大声を出す」(70%程度)、「防犯グッズ等を持たせている」(50%程度)がほぼ共通した内容となっています。

保護者が、子どもが「事故・犯罪」にあうかもしれないという不安の高い場合ほど、子どもへの安全指導(しつけを含む。)が、より具体的です。すなわち、「子ども110番」の場所を具体的に教える(約50%)、特定の「防犯グッズ(GPS付ケイタイ、呼び笛、防犯スプレー、最近ではICタグ方式も含む逗子市の小学生の例があります。))の使い方を教える(約60%)などの傾向が見られます。このことは、身の危険

を経験した程度の高い場合も共通しています。

ここでは、横浜市緑区のA小学校で、警備会社と連携した危険・犯罪回避訓練で使われているスローガン「いかのおすし」が有効に働くと思われまます。「知らない人についていかない。」「おお声を出す。」「すぐ。」「知らせる」で、「いかのおすし」となります。

また、手をつかまえられたら、地面に寝ころがるのも、子どもにとって有効な護身術となっています。

一般に、これまでは「事故・犯罪」への不安は都市部に高く、「医療・治安」の不安は市町村部に高い傾向が見られていましたが、近時はより均一化してきています。身近さとして、中間の近所・近隣、近くの祖父母や親への依存が（救援依頼など）いざという事故・事件の発生時にできるかという不安、すなわち「ヒューマンネットワーク不安」といった概念が生じてきています。地域社会における対人関係や協力関係の希薄化のもたらす「不安」が事故・犯罪の防止へも悪い影響を落としていることの反映とも考えられます。

一方、事故の種別は従前とあまり変化はなく、「転倒した」「人や物にぶつかった」「虫にさされた、動物にかまれた」等が多い。いわゆる「ケガ」は「打撲」「すり傷、切り傷」「脱臼、関節ずれ」「内出血」「火傷」などが共通してみられます。ただし、クラブの「部屋の中がいつも騒々しい」場合に、より多くの事故がみられるようです。また、時間帯では午後4時台、午後5時台が要注意であり、曜日は金曜日と月曜日は特に注意を要するといえます。早い時間帯は「転倒」や「人や物にぶつかる」がやや多く、夕方に近づく「やけど」が多くなるケースも見られています。

「児童クラブ」に対する子どもたちの反応は複雑で、一方で「毎日友だちと楽しく遊べている」「宿題をすることもできる」「おやつが楽しみ」など、楽しく肯定的な反応（80%以上）がある反面、「児童クラブに行きたくないと思う」という反応も多いです（約50%）。意欲が低下して不快であり、精神状態が不安定になると事故につながる「潜在的危険性」も高まる傾向があるので注意を要します。

児童クラブへの保護者の要望は多種多様です。部屋、遊び場の広さの拡充（例：子ども1人当たり3.3㎡以上欲しい）。指導力。トイレの清潔さ。おやつを作るキッチンの衛生面の改善（例：ねずみがかたり、ゴキブリがいるので困る。）。指導員の加配（例：70人以上になって、クラブを2分しても、1クラスに2～3名以上の指導員の配置をして欲しい。）。指導員の資格の向上と研修の充実が必要。傷害保険の加入は必須。おやつ代が高い（保育料も高い。）。親子でも遊べる室内スペースの増設。遊具・施設のより一層の充実（三種の神器としての「ブランコ、滑り台、清潔な砂場」の他にジャングルジム、うんてい（雲梯）、シーソーなども必要）等々、様々です。行政当局もこれらの問題に対処するためには、かなりの工夫と努力を強いられることとなりましょう。

一般に、安全点検やチェックリストのマニュアル作成については、インシデント・アクシデントサーベイに始まって、リスクアナリシス、リスクアセスメント（事前評価も含む。）に進み、子ども、保護者、指導員の「リスクテイク」行動の改善に到達するのが、時系列としての手順であることが判明しました。

今後は、これに、環境（施設・遊具等）と安全指導のプログラム（カリキュラム内容の構造化を含む。）の要素を関連させて、より効果的な安全確保と犯罪防止のためのマニュアルの作成を進めております。

（主任研究者 詫間晋平）

- 文献 宅間晋平：・「学校保健危機管理—地域におけるリスク管理の観点から—」
『保健医療科学』2004年 第63巻 第2号, 97-102.
・「地域におけるリスク管理—子どもの犯罪・事故回避—」
『こども未来』誌（特集 子どもの安全を守るために）2005年 2～5.

資料 8. 「災害に強いまちづくりをめざすために」

— その知恵と対応策について —

『突然の災害！さあどうする』

◎ — 自然災害と人為的災害 —

一口に「災害」といってもいろいろの種類があります。前者の自然の力による災害は昔から「地震 雷 火事」の順に怖いものとなります。そのあとに続く「おやじ」は人為的な現象で、現在はいわゆる「父権」の低下によりさほど怖いものとは考えられていません。

自然災害にはさらに、台風による風水害、洪水、鉄砲水、土砂崩れ、地すべり、雪崩なども恐ろしいものです。ただ、この中には日頃からの対応を怠っていたため二次的に大災害となるものもあります。例えば、上流の保水用の森林をむやみに伐採したため土砂が流出し、大きな河の川底が上がり、民家の屋根より川底の方が高い、いわゆる「天井側」の氾濫のケースもあります。（この場合は、川の中に輪中を作ったコミュニティがむしろ安全です。）

後者の人為的災害は、暴力（バイオレンス）による意図的な外力により傷害を人体におよぼす事例（事件）や、子どもの誘拐殺人などがその典型です。

最近では、いわゆる家庭内暴力（ドメスティックバイオレンス、DV）により、主として女性や幼い子どもが痛ましい犠牲になる例が枚挙にいとまがなく、毎日のように報道されているところです。いわゆる虐待による人為的災害で、肉親により上腕の同じ部位を何回も骨折させられたり、体中に「たばこ」の火によるやけどの跡が沢山ある、かわいそうな幼児も後を絶ちません。生命と人身の自由を保全する処々の法律の基礎となっている「人間に固有な尊厳」はどこにいったのか疑われ、その存在が危うくなっているといえます。

ここでは、紙面の関係で、古来から一番恐ろしいとされる「地震」への対応策について考えてみましょう。

1868年の明治維新により我が国が近代化して以来、歴史に残る「大地震」として1923年9月1日の、いわゆる「関東大震災」でマグニチュードは7.9とされています。ちょうど昼仕度をしている午前11時58分に発生したため、調理（クッキング）のための火を消すひまもなく逃げ出したため、その後が続いて起きた大火災により多くの焼死者も出ました。その炎の火力で隅田川の水がお湯のようになり、その水面は炎のアーチで覆われて酸欠状態となりました。そのため、川に向かった多くの人々が橋のたもとで死亡していました。死者は約9万1千人ですが、不明者を加えると10万人以上となります。

地震が来て慌てて外に飛び出すと、屋根瓦がすべり落ちて人の後頭部に当たり死亡するケースも多かったといわれます。まず、火元（ガスコンロ、電熱器など）を消して一呼吸おいてから、通路を確保して外に出る方がより安全です。

関東大震災では隅田川方面よりも宮城（皇居）方面に荷物を持たずに退避した人の多くが助かっています。荷物が多いと火の粉がふりかかって火だるまとなりやすいの

です。また、助かった人の中には、ふだんから「やかん」に水を入れており、それを持って出たため水分補給がとぎれずに生きのびた人がいたといわれます。今日でしたらペットボトルや缶コーヒーなどを携帯すべきでしょう。水は1日約3ℓ必要なので3本欲しいのですが、老人や子どもは体力に合わせて1本にしておきましょう。また、逆さにすると腰掛にもなるバケツや、いわゆる「防空頭巾」や帽子も大変役立ちます。

いわゆる防災グッズは沢山ありますが、あまり欲張らずに昔の人々の体験に基づいたもので、かつ自分のニーズに合うものを日頃から備えておく必要があります。

現在はIT社会ですから、まずケイタイの電源確保が重要です。電池式よりもソーラー式で充電もでき、どのタイプのケイタイの電源ともなる充電器（小型）が便利です。ケイタイが働いておればインターネットによる「災害用伝言板」や「伝言ダイヤル-171-（いない）」を活用することが可能となります。大地震の時は、いわゆる固定式の公衆電話は使用が難しくなります。そこで念のため10円、100円などのコインは常に持っている方がよいでしょう。

これらの先人の体験から来るちょっとした知恵は、とっさの時には大変役立つものです。保育園や幼稚園、児童クラブ指導者は知っておいて損にはなりません。しかし、まず無事で家・建物の外に出られなければ役にたちません。

1995年（10年前）に起きたいわゆる「阪神淡路大震災」の時もそうでしたが、家または建物の中で9割以上（約95%）の人が亡くなっています。そして、その大部分（約85%）は家具等の下敷となって死亡したといわれます。一番悲惨なのは家具やはり（柱）の下敷になっても頭はやられず即死ではないのですが、落ちてきた柱に胴や足がはさまれて身動きが出来なくなった人々です。その後に発生した火事（早朝5時50分頃は、まだ全市で3～4箇所小さな家事でありましたが、消防車が障害物のため通行できなかったのも初期消火ができなかった関係もあります）で焼き殺された、かわいそうな人々も含まれています。

そのため、家具は、天井との間にネジ式のつかい棒をあてて倒れないようにする必要があります。（つかい棒はなるべく壁に近く、かつ天井のはりに当ててセットすること。）

また、L字型の転倒防止金具で止めるのもベターです。

大型テレビを含めて重い物は高いところに置かないようにしましょう。震度6以上になると、それらの固定されていないものは飛んでくる危険があります。戸棚の中のものも飛び出さないように「扉開防止危惧」をつける必要があります。ガラス戸や窓には飛散防止フィルムを張る必要も出てきます。

何よりも寝室には大型の家具は置かず、日頃から避難経路（出口）を確保しておくべきです。（最近ではベッドの空間のみを守るフレームもあります。）

これらの注意事項は来るべき地震に備え、個人個人の知恵として見につけ、かつ実践しておくべき大切なポイントの一部に過ぎません。（70～80年も経つとプレート型の大地震は周期的に99%の確率でやって来ます。）

◎ —「面としての防災のネットワーク」—

さらに重要なことは、これらの「点」としての個々人の対応策を「面」としてのネットワークに構築していくことです。

個々の知恵や経験をいかし「面としての防災」に移行すること、つまり安全な町づくりには、一つには、すでにある子どもの安全・安心と犯罪から子どもを守る安全や防犯のための組織や子育てのための事業を活用する手法があります。

「母親クラブ事業」や「放課後児童クラブ」の保護者会や各地の「女性フォーラム」（女性会議組織）など、いわゆる「子縁」をつなげた、より大きなネットワークの中で協同して学習（コラボレイティブ・ラーニング）し実践してゆくことが、より効率的で安全となります。

保護者、住民、行政（警察を含む。）、ニュータウン開発会社等をつなげた、いわゆる「プラットホーム」（連合体）を作ってゆくねらいがあります。いくつかの例を共同研究者の松村みち子先生（タウンクリエイター代表）の調査と指導の例から紹介しておきましょう。*

まず、松村先生が指導された成功例としての愛知県春日井市の「女性フォーラム」における「防災」のプログラムには次のように書かれています。

【 防災 】

標 語	もしもの時、あなたは避難所や避難経路を知っていますか？
活動のねらい	東海、東南海地震が遠からず襲来するといわれています。昔から「備えあれば憂いなし」といわれていますが、常日頃から防災意識を持つことが、もしもの時に役立つと考えます。子どもたちへの啓発が、ご家族並びに地域の人々への防災意識を持つきっかけづくりになることを目的とします。
活動の内容	①チェックシート②安全マップ③非常持出袋④クイズ⑤学習のまとめ
体験学習	グラッキー試乗（人工地震の体験）等

次に、千葉県佐倉市の北西部に展開しているニュータウン「ユーカーが丘」（人口約1万4千人）の安全・安心の諸活動の中の「私設交番」と自立型の「24時間タウンパトロール」も、携帯型発信機の貸し出しと連動して有効です。ここでは、防災の「面」として、より緊密な地域ネットワーク作りができています。これは防災にも即戦力として活用できるものであります。

さらに、より大きな訓練としては同一方向に向かう「帰宅困難者」（中央防災会議では関東の直下型地震では1都3県で約650万人が帰宅困難者となると予測している。）の訓練を活用する方法もあります。人気の高い「震災時帰宅支援マップ」をテキストに、訓練の各地域のグループごとに協同学習（協調学習）を深めてゆきたいものです。

（主任研究者 詫間晋平）

*（詫間晋平(代表)「地域における子どもに係る犯罪・事故回避に関する研究」（平成16年度厚生労働科学研究：研究報告書平成17年3月）

資料9. 防犯教育用「ジャンボ絵カルタ」の開発とその手引き

(1) 防犯用ジャンボ絵カルタの開発

毎日のように新聞やテレビで、子どもが被害者となった事件や、事故の報道がされています。

このような痛ましい子どもたちの被害を防止し、回避するには、学校や幼稚園・保育所での安全指導に加え、各家庭での日常、折にふれての保護者の指導が必要です。

特に、子どもの防犯教育にあたっては、単なる抽象的な知識として教えるのではなく、具体的な日常生活に密着した出来事を取り上げて、細かく教えることが大切です。

そして、同じことを繰り返して指導しなければなりません。

この「防犯教育用ジャンボ絵カルタは、楽しく親と子がカルタ遊びをしながら、知らず知らずのうちに、誘拐や性被害、殺人などの痛ましい事件から子どもの身を守る方法を覚えることができます。し

かも、ゲーム遊びとして子どもたちを飽きさせず、防犯の学習をさせることがかろうです。

このカルタを、お子様の安全のために十二分にご活用されますことを願っています。

ジャンボ絵カルタの見本は別紙の通りです。次のスタッフがあたっています。

また、添付の試作品の絵は、漫画家の所ゆきよし氏のご協力をえました。

● 安全カルタ制作スタッフ

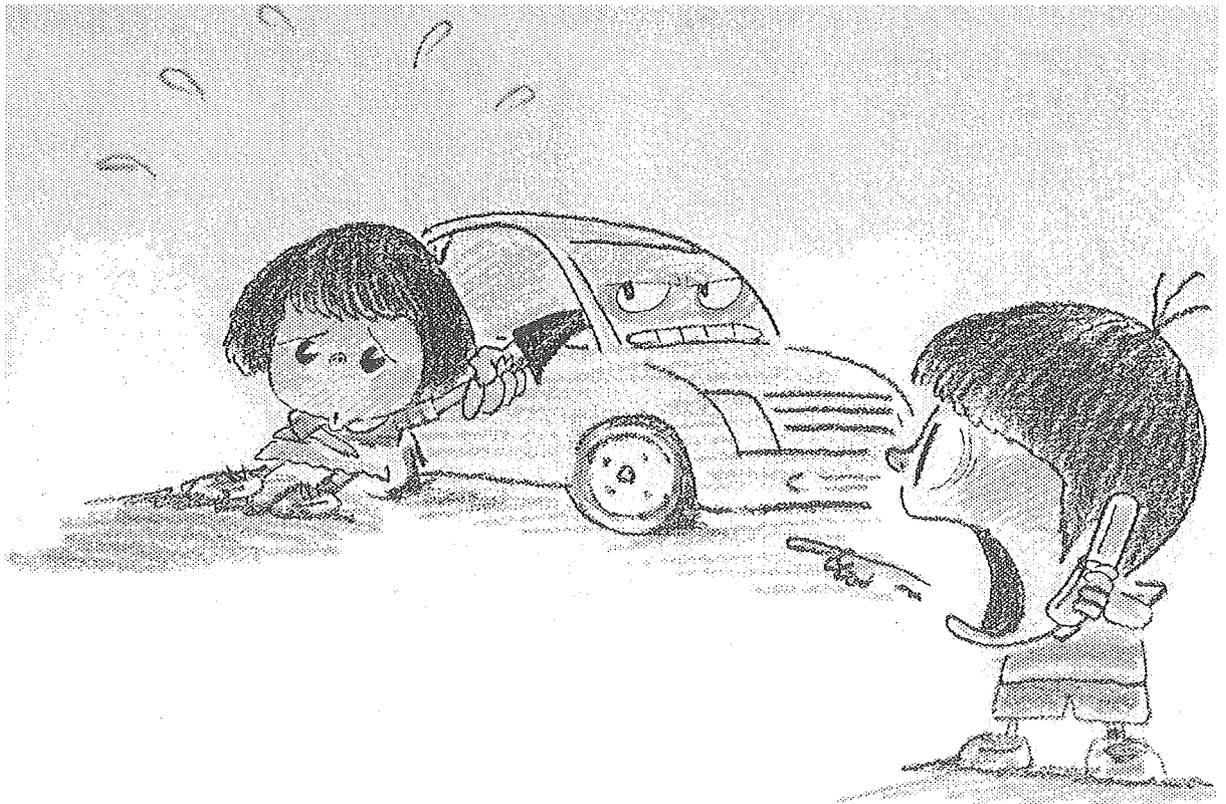
古角好美	五十嵐昌江	満永孝司
上田忠晴	上田邦子	陣内富貴
松岡弘	岡田潔	藤原孝雄
中川八重	楠本久美子	詫間晋平

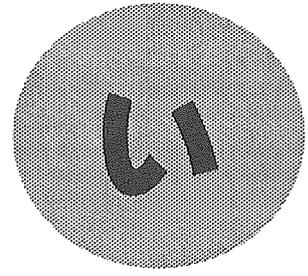
あ

あやしいな

そんなときには

すぐしらせる





いつものみち

きまりをまもって

とうりょう

げんごう

登校 下校

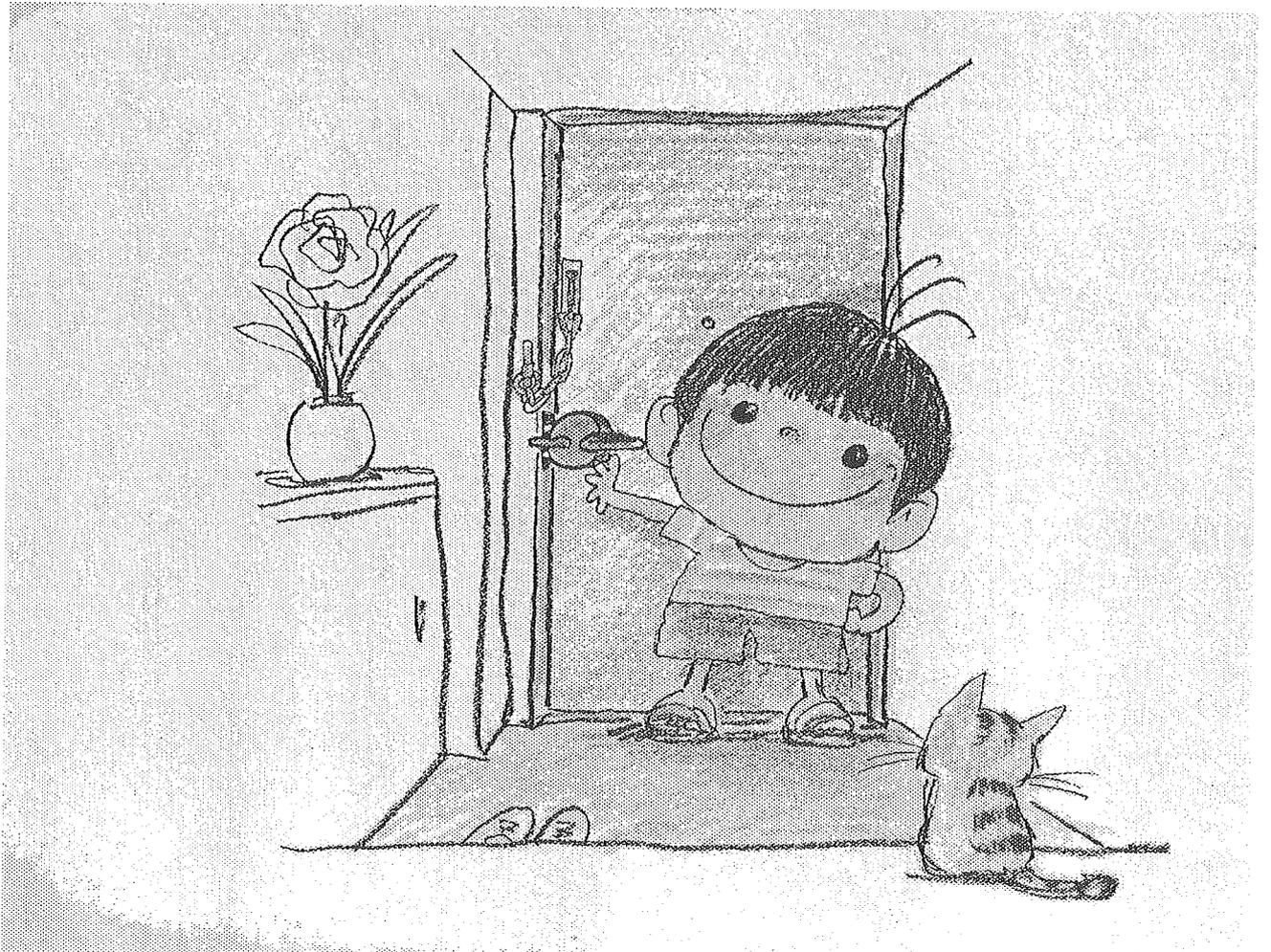


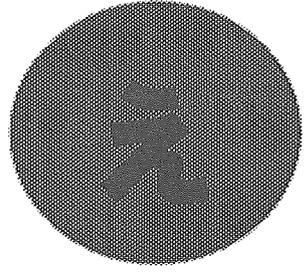
う

うちの かぎ

しつかりかけて

おるすばん





エレベーター

ひとりでのらない

あそばない



お

おしえない

なまえ じゆうしよ

でんわばんごう



資料 10. 提案書

厚生労働省育成環境課

前略

其後 失礼致しております。

昨年度アンケート調査におけるご指摘の「三問」他は、本年度も同様の質問を致し、経年的変化を分析しつつございます。(犯罪への不安は、郊外地域で急速に増大し都市の下町の状況に近づきつつございます。)

今回の 2005 年 11 月 22 日、木下ありさちゃん(広島市.7 歳. 小1)と 2005 年 12 月 1 日、吉田有希ちゃん(今市市.7 歳. 小1・未解決)、(cf.2004 年 11 月、奈良市.7 歳. 女小1)等、約 2 年おきごとに小学校低学年の女子を対象とした誘拐、殺人事件が、1997 年 3 月の神戸市の事件より連続して発生していることは誠に悲しいことであります。

特に今年のケース(事件)は「小児性愛」(人形性愛)と「快樂殺人」(「悪魔が体を動かした」)のが理由;自称カルロス本人、「ねずみ人間が出て来てやった」;宮崎勤と類似性あり。)の双方が重なった最悪の事件と推定されつつあります。

このところ 7 歳前後の少女が被害にあっています。犯人からは最も弱い学年であり、被害者本人は、大人をすぐ信用してしまうなど、急に家庭から離れ、学校社会、地域社会に未だ充分適応できないでいる段階でありましょう。

木下ありさちゃんのケースでは、当日は友だちの早退や祖母の迎えなしのため一人となった直後に誘拐されています。その誘拐も突発的なものでなく、チョコレートや赤い携帯で自分の娘の写真(トーレス・ヤギ、33 歳本名)などで以前から手なづけていた形跡があります。吉田有希ちゃんも銀行 ATM 前で「目のきれいなお兄さん」を待っていたのを目撃されています。

今回のアンケート調査の分析は未だ進行中でございますが、現在の時点でのご提案の「案」を記入させていただきます。

- ◎ 小生共が全国で最初に、(財)国際交通安全学会刊で提唱しました「ヒヤリ・ハット地図作りマニュアル」(交通安全、防犯、防災(別))の改訂と保育所、幼稚園、小学校低学年の子ども本人と保護者、祖父母(三代ミックス)の協同作業の実施の推進(初版は VTR と共に約 3,000 部ほど配布済み)。
- ◎ 「面」として地域のネットワーク(コミュニティーママプラザプロジェクト;岐阜県、地域プラットフォーム;東京都、女性会議;春日井市などの活動を、防犯面を中心に強力に展開してゆくこと。(全国で防犯ボランティア団体は約 1,400。)
- ◎ 各園、各校で「いかのおすし」標語の教育と訓練の徹底。
- ◎ 登降園、登下校時にスクールポリスの巡回と、子どもは事情のいかんによら

ず、一人で登降園、登下校をさせない。(工夫が必要)。

- ◎ 各種の防犯グッズはあまり役立っていない。(手なづけられているので、グッズごと犯人に持っていかれている。)。要所における監視カメラ(かくしカメラ)の増設、防犯灯(通報機能付、ソーラー式)の方が、より有効と思われる。
- ◎ 性犯罪者の再犯率は高い(約50%前後)ので、効果的な矯正プログラムの導入と強化(刑務所等で。) cf. (性犯罪常習者の通報、情報公開も必要。)

また、外人労働者も益々増加する(ペルー人だけで5万人以上)ので、ブラジル等の派遣国の政府と連携した国際的な防犯(矯正プログラムを含む)のスキーム(計画)が必要な段階に入った。(トーレス・ヤギ 33歳のトルヒーヨ市戸籍係での出生届けの偽造(不正発行)は、過去3回以上の性犯罪歴があり、逃亡中であったことが最近判明(12/9))した。

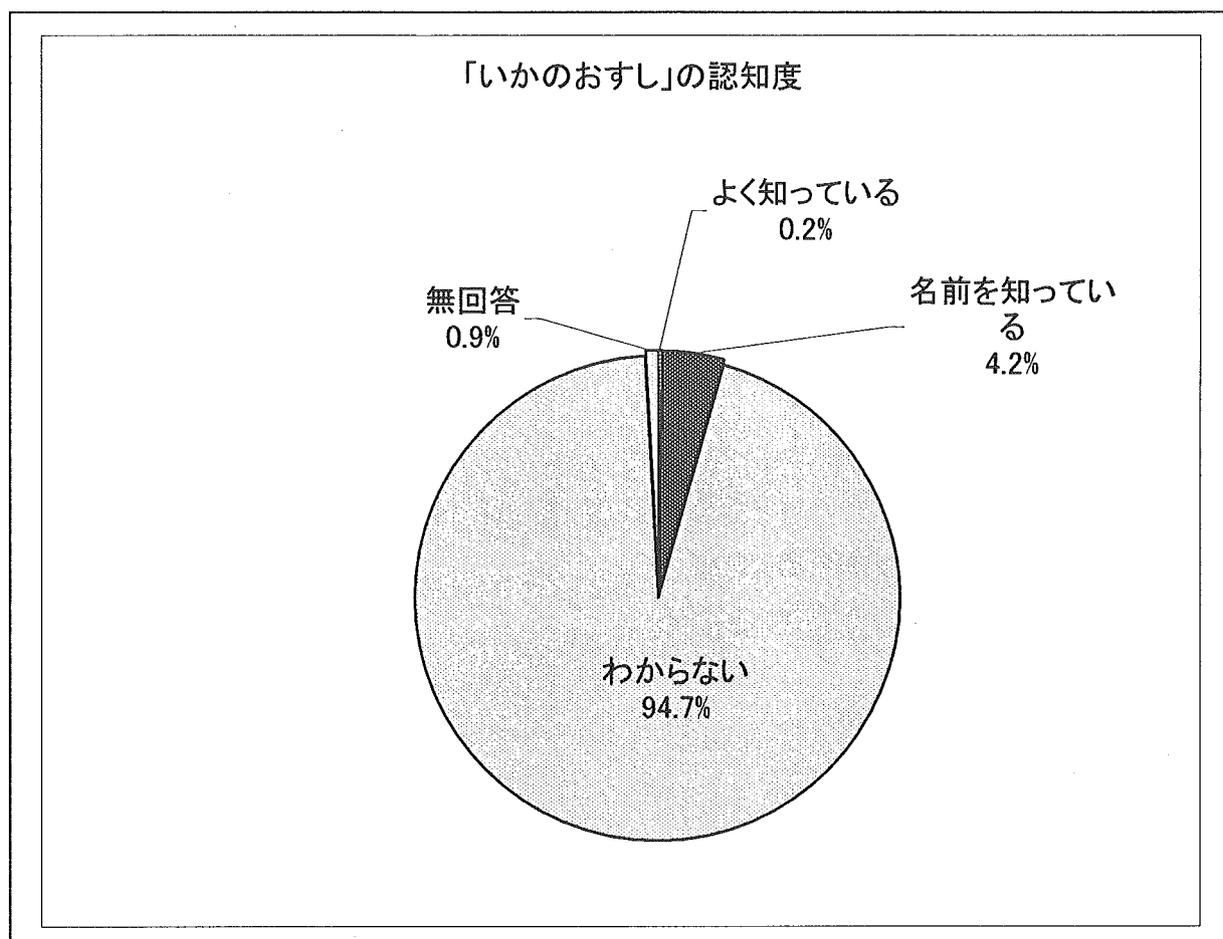
上記のいずれも、補助金(ハード面)や指導者養成(ソフト面)等が必要となってくるかと存じます。

とり急ぎ、私見をお送り申し上げます。

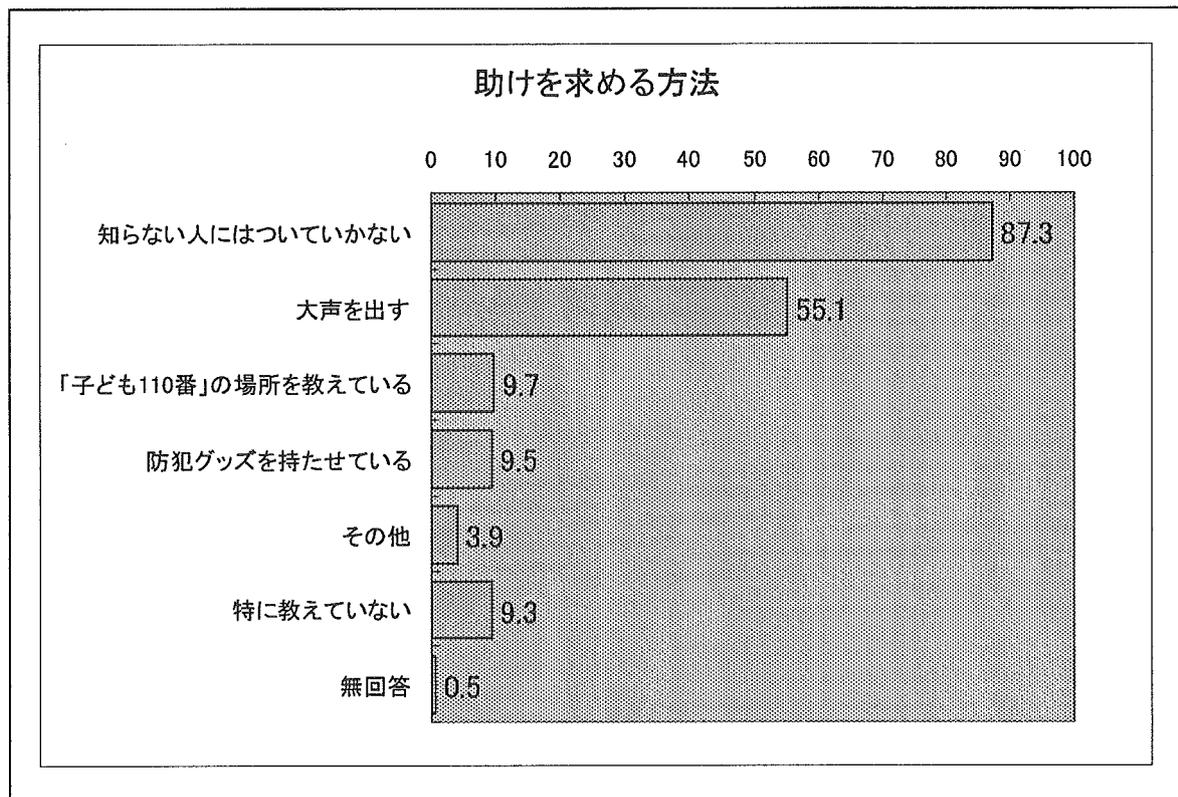
医福大、9F(詫間 晋平)
Tel/FAX 045-774-2211
PHS 070-5593-2088

資料 11. 子どもの健全育成上の問題に関する回答

1. 「いかのおすし」への保護者の認知度



2. 子どもに教えている「助けを求める方法」



3. 子どもを犯罪から守る地域活動への参加状況

